

二〇一二年度

J₁ 国語問題

注意

- 一、試験時間は五〇分です。
- 二、「はじめ」の合図があつてからページを開くこと。
- 三、解答用紙に、受験番号・氏名を記入すること。
- 四、解答する文字はくずさず正確に書くこと。
- 五、字数制限のある問題については句読点を字数に含めること。
- 六、解答用紙のみ提出し、問題用紙は必ず持ち帰ること。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。ただし、「」は語句の意味で、解答の字数には含めないものとします。

人間の生き方を決める重要な価値観は、いつたいなにかっこいいと思うのか、ということだと思ひます。とくに子どもにとっては、それによつて、自分が集中したいこと、磨きたいことが決まり、その後の進む道に大きな影響を与えます。

僕自身のことを言うと、子どものころから、^①自分の父親のことをとてもかっこいいと思ひていました。しかし、うちの父がどれだけかっこよかったか、外見で考えてみると、僕が高校生のころ還暦を迎えた父は、小柄で、しつかりおなが出ていて、髪の毛は薄くて真っ白でした。着ているのも古ぼけたスーツ、それも母が繕つて直した箇所がたくさんあるようなものでした。

でも、そんな父をやはり僕はかっこいいと思ひていました。いつたいなにかっこよかったのかというと、それは父のもつ広く深い知識です。まわりの人たちも、あなたのお父さんは本当に頭がよくてすばらしいわね、と言つてくれましたし、僕自身も、小さなころからなにを聞いても教えてくれる父を、まさに歩く百科事典のようなすごい人だ感じていました。

ちなみに父は、決してスポーツ万能でもありませんでした。僕が六、七歳だったときには、父はすでに五〇代だったこともあつて、日曜日に一緒にサッカーをやったりすると、もう僕の方がうまかったほどです。少なくとも走るのは全然かまいませんでした。しかも、大工仕事も苦手で、家でもなにか壊れても直すことができませんでした。それでも、^②なんでも知つてゐる父は、それだけで十分かっこよかったのです。

そんな僕がその父から教わり、受け継いだのは、やはり学ぶことの大切さ、そして楽しさでした。僕が子どものころ、両親の寝室にテレビがあつて、夕食の後には家族はみなそこに集まることが多かつたのですが、そんなときも父はひとりテーブルに座つて、医学の論文や難しそうな本を読んだり、タイプライターで論文を打つたりして、ほとんどテレビは観ませんでした。

母と姉はたいいていテレビを観ていましたが、僕は観たり観なかつたりで、観ないときにはときどき、勉強でわからないことを父に質問しました。すると父は、読書や執筆の途中でも嫌な顔ひとつせず、いつでも手を止め、喜んで教えてくれたのです。

父にもわからないことがあると、じゃあ、あした一緒に調べようと約束して、翌日は図書館に行きます。僕が席に座つてゐると、父は本棚から立派な大きな本を出してきて、目を通したりノートを取つたりしていろいろと調べ、納得がいくと、「はい、これはね……」と僕に説明してくれました。

彼がそうやつてなにか調べたりしているときの表情を見ると、毎日朝から晩まで病院で働いて、家でも論文を書かなければいけないのに、その上なんでこんなことまでやらなければならないんだ、というような不満の影はすこしもないのです。

それどころか、新しい **A** を得ることができると喜びや楽しさが、彼の顔を明るく照らしてゐました。

それを見てゐた僕は、やつぱり学ぶというのはすごく楽しいことなんだ、もしかして、人生でいちばんの喜びなのかもしれないぞと思つたのです。なにも教えてくれないくせに「勉強しなさい」とくどくど言つたりするのではなく、自分の行動や生き方を通して学ぶ楽しさを伝えてくれた父に、僕はとても感謝してゐます。

しかし、知識よりも、容貌や服装にかっこよさを感じる人も多いと思ひます。そのなかでも、身につけるもの、それもとくに高級なもの、ブランド品こそかっこいいと思ひ人もゐるでしょう。ここでブランド品はかっこいいのかということ、すこし考えてみたいと思ひます。

世の中はまったく不条理【筋が通らないこと】なものでは決してありませんし、商売の世界でも合理性は成立してゐますから、五〇万円のバッグは、五〇〇〇円のかばんより間違いなく質が高く、五〇〇〇万円の車は、一〇〇万円の車よりはすぐれた機能をもつてゐます。基本的には、値段が高ければ高いほど、機能や質、耐久性などはすぐれてゐるものです。 **A**

僕は、ブランド品を買つて身につけたりすること自体は、それなりに **B** 的な行為で、批判する対象にはならないと思ひてゐます。

ただし、その商品が自分の身の丈に合つてゐるか、ということは重要です。資産家や国会議員のように非常にお金がある人

は、何十万円のバッグを買っても、何百万円の腕時計をはめても、何千万円のダイヤのネックレスをプレゼントしても、それはそれでいいのではないかと思います。お金があるのなら、それをただ銀行にほったらかしにするよりは、使ったほうが経済のためにもよいでしょう。

しかし、問題なのは、手持ちのお金ではとても買えないようなものを、無理して買ってしまうことです。いまの社会には、後払いという名のローンの制度がいろいろあつて、それによつて破産する人もたくさんいます。家を買うのにローンを組むのは仕方ないことだと思いますが、五〇歳の人が三〇年ローンを組んだりするような社会は、やはりどこかゆがんでいると言わざるをえません。こういった身の丈に合わない無理な制度は、やたらに消費をうながす風潮が生んだものです。そこではブランドによるイメージ戦略も、大きく影響してきました。

僕も、以前はたまには高いものを買うことができました。でも、あることをきっかけに、僕はブランド品とは完全にお別れをしました。二〇年近く前、僕は韓国に行きました。そのころ勉強していた韓国語の成果を確かめてみたかったので、日本が梅雨であり大道芸ができない時期を選んで、一〇日ばかりソウルに行くことにしたのです。

滞在した最後の週末は天気も良くて、ソウルの街でたくさん大道芸をすることができました。すると日本円で三万円ぐらいのお金になったので、せっかくだからなにかいい物を買おうと思いました。僕はソウルの中心にあるミンドンというところで、ゴルフウェアのブランドの店に入り、そこですてきなバター色のズボンを買いました。僕はゴルフもやりませんし、そのブランドのことも知らなかったのですが、予算にもびつたりで、とてもいい色で、僕はおいに満足して東京に戻ってきました。

そして、ソウルで知り合った日本人女性に電話をして、デートに誘いました。その週の土曜日、表参道で待ち合わせです。僕は買ったばかりのバター色のズボンを履いて、いつもの通り、アパートにとめている自転車に乗って、気分よく出発しました。すると二〇〇メートルほど漕いだところで、ズボンが自転車のチェーンに挟まってしまったのです。いつものズボンより裾が広がっていたせいでしよう。せっかくのバター色のズボンが、汚い油の色に染まってしまいました。しまった、これはク

リーニングに出しても落ちそうにないぞと後悔しながら、とりあえずこのままではデートに行けないとあわてて家に戻り、いつものズボンに履き替えました。それから表参道まで行つたのですが、やはり待ち合わせにはすこし遅れてしまったし、思ひ出すと気分も悪くてあまり会話も弾まず、結局、デートは台無しになってしまいました。

その翌日、あるブランド好きの友人の家に夕食に行きました。そこで食事をしながら、きのうこんなことがあつたと悔しうに話したら、おまえはばかだと言われました。そんな立派なズボンを買つたなら、おまえは表参道までタクシーで行くべきだった、たつたワンメーターの距離だろうに、と言うのです。そのときは、それなりに正しい意見にも思えました。しかし、僕は帰り道、あのときの悔しさを思い出しながら考えた結果、彼とはちがう結論に達しました。それは、おれはもうブランド品は買わないぞ、という結論でした。

彼の話をよく考えてみると、僕はまるでズボンのために生きなければならないように思えました。まず先にズボンがあつて、僕はこのズボンを活かし、守るために、ああたりこうしたりしなければならぬのだと。でも、ズボンはあくまで僕のためにあるのだと僕は思いました。ズボンのために僕があるのではない。ズボンのために自分の生き方を変えなければならないくらいなら、そんなズボンはいらぬじゃないかと思つたのです。

お金持ちならそんなズボンを履くのもいいのです。すぐお金を持っている人には、三万円なんてはした金かもしれませぬ。そんな人は、このズボンを履いてレストランで食事をして、スープをこぼして駄目にしてしまつても、まあまた新しいのを買えばいいや、と思うのでしょう。

ウ、ふつうの人には三万円は大金です。そんな身の丈に合わない服を着ていると、いつもの振る舞い、いつもの生き方を変えなければならぬ。そんなふうにもズボンのことを顧みて生きるなんて、ちつともかっこよくないと僕は思つたのです。

父は僕に、「おまえの財産は頭と心だけだ」とくり返し言っていました。ユダヤ人だった父は、戦争中に家や財産を奪われ、お金はいつなくなってしまうかわからない、ということをもつて経験していました。しかし、頭と心のなかに蓄えられたものは、生きている限り誰も奪うことができないのです。父の言うとおり、僕にとっていちばんの楽しみは、知識を得たり、

人と出会ったりすることなのです。

おなじ消費をするなら、物質的な消費をするよりも、知的な材料を消費する、知的消費をするほうが僕はずっといいと思っています。物質的な消費、とくに先進国で行われている過剰消費は、間違いなく地球を滅ぼすものです。物質的な消費には必ず限界があり、しかも僕たちはその限界にかなり近づいているように見えます。温暖化現象もその表れのひとつでしょうし、また石油、石炭、鉄鋼など、地球にある天然資源もどんどん少なくなっています。

物質的な消費の志向は、どこかで変えなければいけないのです。必要なものは消費するけれども、過剰な消費はしない。まだこの靴はどこにも穴が開いていないのだから新しい靴は買わない、この車もまだ走れるのだからまた車検を通しておなじ車に乗る、というような生き方は、経済発展にはプラスにならないかもしれませんが、地球の未来のためには必要不可欠だと思います。そして、かわりに知的な消費を楽しめばいいのです。

⑤ 知的消費と物質的消費では、環境への負荷の度合いが大きくちがいます。知的消費のために必要なのは、本などを印刷するための紙やインク、機械や工場、そしてそれを動かす電気くらいです。そもそも、新しく本をつくらなくても、図書館で古い本を借りてもいいのです。それは、知的消費が、物そのものではなく、そのなかに含まれている情報を消費するものだからです。

物質的な消費は、物そのものを消費するので、どんどん資源を使わざるをえません。物はあげたり使ったりしたら、なくなってしまうからです。僕が一年履いている靴をもらって喜ぶ人はいないでしょうが、そんな靴でも、あげてしまったら僕は困ります。新しい靴を買わないといけません。靴の持ち主は基本的にはひとりしかいないからです。数人で共有するにしても、その数は限られるし、使えば傷んでやがてはなくなります。

ところが知識は、いくら人に教えてあげても、自分の分が減ることはありません。学校の先生は、日々自分の知識を生徒たちに伝え、配っていますが、それで先生の知識は減ることはありません。それどころか、授業の準備のために、整理したり、真偽を確かめたり、教え方を工夫したりすることで、先生の知識もより深まるのです。知識は世の中に広がれば広がるほど、

⑥ 増えていきます。物質的なものにくらべたら、まるで魔法のようなものです。だから僕はぜひ、みなさんに知的な消費をすすめたいのです。

とはいえ、知的な消費がつまらなかったら、だれもそちらに切り替えようとは思いませんね。僕がどんなふうに知的消費を楽しんでいるか、まずそれをお話しましょう。

知的消費の楽しみのひとつは、多くの人がつくりあげてきた知識の体系に触れることです。研究者というのは、自分のテーマについて考え、論文を書くのはもちろんですが、それと同時に、自分のテーマとは直接関係ない、ほかの人の論文を読んだりもします。僕も数学者なので、家には数学の専門雑誌が届きますし、大学の図書館で探して読むこともあります。たくさんある雑誌のなかから、論文のタイトルを見て、自分の関心のある分野かどうか判断します。さらにアブストラクト、つまり内容を何行かで要約したものに目を通して、おもしろそうだったら読んでみる。ときには、学者の名前で、この人ならすごいことを書いているだろう、と判断することもあります。

⑦ そしてほかの人が書いた論文を理解しようと取り組みます。それを読めば新しい論文が書ける、というような直接的なメリットはないことしばしばです。数学ではとくに、専門の学者が長年取り組み、やりとげた問題について、自分がさらに一歩踏み込む余地があるかという、その可能性はとても低いのです。

でも、学者にとって、自分のやっている学問分野は、いくつもの研究が積み重なって、ひとつの美しい世界を構成しているように感じられるのです。その美しい世界のなかのひとつの小説、ひとつの詩を読む、そういう気持ちでほかの人の論文を読みとくのです。もちろん、なかには難しい箇所があつて、式を書いたり計算をしたり、ときには一日置いて、翌日また最初から読み直したりして、大変なこともあります。しかし、そうしたプロセス【過程】全体を楽しみながら、なんとか理解できたとき、また世界の美しさのひとつに触れた気持ちがします。

エ、次はもうすこしラフ【気楽】な学びの楽しさを紹介しましょう。僕はこの本を書くあいだに、インドに行く計画を立てました。二十何年前に行ったとき、一度も訪れていなかったのですが、インド人の男性と結婚してインドに暮らして

いる日本人の知り合いを訪ね、さらにインドの北部で開催される数学の国際会議にも参加しようと思ったのです。

僕は今回インドに行くにあたって、ヒンディー語の教科書を三冊買いました。そのなかの一冊にはCDが付いているのもあって、毎日、すこしでも暇があるときには、そのCDを聴いたり、文字を書いたり、テキストを読んだりしています。

しかし、旅行にいく僕にどれだけヒンディー語が必要なのかと考えてみると、友だちはもともと日本人ですからもちろん日本語が使えますし、もっと便利なことに、彼女も旦那さんも英語がとてよくできるのです。⑧いくら僕が頑張ったところ

で、彼らとのコミュニケーションのためには、つたないヒンディー語はあまり役に立たないでしょう。数学の国際会議のほう

も、参加者にはアメリカ人やドイツ人など、いろいろな国の人があるので、発表は当然英語になります。参加するインドの大学の先生も、英語はみな理解できます。そこでもヒンディー語の出番はあまりなさそうです。どうやらヒンディー語を使うのは、ひとりで観光に行ったり、レストランで注文したり、街角でインド人に話しかけたりするときくらいなのでしょう。

それなのになぜ勉強するのかというと、それは勉強することが楽しいからです。まだ行っていない旅の場面を頭のなかで想像して、ここでもこんなことを話してみたいなと思う言葉が言えるようになったり、最初はちつともわけのわからなかった文字にすこしずつなじんできて、それなりに早く読めるようになったりある程度書けるようになったりするのが、とても楽しいのです。

知的消費に関して一般的に言えるのは、消費すればするほど、楽しさが深まるということです。たとえば、ワイン好きの人のことを考えてください。ワイン好きと言っても、きちんとワインの味や香りを楽しむ人たちのことです。飲んだワインの種類が増えれば増えるほど、はじめて飲むワインでも、いままで飲んだどのワインに似ているのか、どこが新しく特別なのか、などと、経験の浅いころよりも多くのことを感じられるようになります。

語学でもおなじことです。自分の頭のなかのいろいろな知識が増えれば増えるほど、新しい知識を前の知識とくらべたり、つなげたりすることができるようになりますので、僕もヒンディー語を学びながら、知っている言語とくらべてみるのがとても楽

しいのです。

オ、言語のことをヒンディー語で「パース」と言いますが、それを知ったとき、インドネシア語でおなじく言語を意味する「バハサ」という単語と、おなじ語源をもつのではないかと思いました。地理的にも近いし、きっとインドネシアは、先進的な文化をもったインドと古くから交流し、そのなかで言語的な影響を受けてきたんじゃないか、インドネシア語の単語のなかにも、ヒンディー語やサンスクリット語にルーツを求められるものがけっこうあるんじゃないか、と考えたわけです。後で調べたところ、「パース」に関する僕の推論は正しかったようです。

もちろん、ただ推論するだけでなく、さらに調べて確認することが必要です。しかし、知識が増えたらこんなふうに推論する楽しみは増えていくのです。語源を考える楽しみというのは本当に小さな例にすぎませんが、知的な消費はすればするほど、新しい知識を消費するときの喜びが増す、ということをおぼえてもらいたいです。

学ぶというと、なにか学問的なことではないかと思いかもしれませんが、情報を得て、さらにそれを自分で調べたり考えたりすることによって自分のものにする活動は、すべて学びの一種、僕の言葉でいうと知的消費のひとつだと思います。

たとえば、新聞を読んだり、ニュースを聞いたりするのも、それだけでおならず、いったいこの原因はなんだろう、なぜこの問題がそんなに大きく報道されているのだろうと疑問をもち、自分で筋道をつくりあげていけば、それは立派な学びです。

ただ⑨ニュースを聞いて、へえと聞き流しているような状態は、物質的な消費に喩えるなら、車を買ったのに車庫に入れたまま乗らないようなものです。服や靴を買ってもそれを身につけなかったら意味がないのとおなじように、知識は自分のものにするこ

とではじめて意義が生まれ、楽しさも味わえ、記憶に残っていきます。そして、新しいニュースを聞いたときには、似たようなニュースを思い出して、くらべながら、自分なりの理論を発展させることができるようになります。学びのための材料、消費するべき知的な材料は、まわりにたくさん転がっています。そのなかから宝を拾うのか、無視してその上を歩いてしまうのか、それはあなた次第です。たとえ忙しくて、興味を取捨選択して範囲をしぼっておけば、知的な

材料を拾うことは十分可能です。ニュースにしても、ニュースキャスターではないのだから、興味もてる分野だけ、新聞で言えば、経済欄^{うん}だけ、生活面だけでも、アンテナを張っていればよいのです。たとえ狭い分野のなかでも、積み重ねていくことで、ほかの人の何倍も楽しむことができるでしょう。

学ぶことは人間にとって、間違ひなく楽しいことです。人間は本来、好奇心旺盛^おな生き物です。子どもはみな、あらゆることに興味をもちます。学ぶのが好きだと思いつづけることは、ある意味では、どこかに子どもの心をもちつづけるということです。

(ピーター・フランクフル著『ピーター流生き方のすすめ』より・一部改変)

問一 文中の

A

、

B

に入る適切な二字の熟語を文中より抜き出して答えなさい。

問二 文中の

ア

く

オ

に入るつなぎことばを次の中から選び、番号で答えなさい。ただし、同じ番号を二度使

わないこと。

1 たとえば

2 だから

3 しかし

4 また

5 さて

問三 — 部①「自分の父親のことをとてもかつこいいと思っていました」とありますが、なぜですか。文中の言葉を使って十
五字以内で答えなさい。

問四

— 部②「なんでも知っている父」をどのようにたえていますか。文中より適切なところを抜き出して答えなさい。

問五

— 部③「身の丈に合わない」とはここではどのような意味で使われていますか。文中より抜き出して答えなさい。

問六

— 部④「それなりに正しい意見にも思えました」とありますが、結局筆者は正しいと判断しませんでした。その理由を

答えなさい。

問七

— 部⑤「知的消費と物質的消費では、環境への負荷の度合いが大きくなります」とありますが、物質的な消費が環境
への負荷が大きいのはなぜですか。その理由を文中の言葉を使って答えなさい。

問八

— 部⑥「物質的なものにとくらべたら、まるで魔法のようなものです」とありますが、知識のどのような点がそうなの
か、物質的なものと比べながら答えなさい。

問九

— 部⑦「ほかの人が書いた論文を理解しようと取り組みます」とありますが、筆者はほかの人の論文を読むとき、どの
ような気持ちで読み進めると述べていますか、答えなさい。

問十

— 部⑧「いくら僕が頑張ったところで、彼らとのコミュニケーションのためには、つたないヒンディー語はあまり役
に立たないでしょう」とありますが、それにもかかわらずヒンディー語を学んでいるのはなぜですか。その理由を具体的
に述べた文が二箇所あります。それぞれの一文の初めの五字を答えなさい。

問十一

— 部⑨「ニュースを聞いて、へえと聞き流しているような状態」が「学び」といえないのはなぜですか、答えなさい。

問十二

次の言葉を使って筆者の主張を六十字以内で答えなさい。

【知的消費 ・ 好奇心】

二

次の1〜5について、それぞれ①〜④の短文の（ ）には、同じ和語（外来語や漢語ではない日本固有のことばで、訓読みに用いられることば）が入ります。その和語をひらがなで答えなさい。また、その和語とほぼ同じ言い方を後の語群から選び、①・②についてだけ記号で答えなさい。ただし、それぞれの語群の中で同じ記号を二度使わないこと。

1 ① 不純物が（ ）。

② 明治中学校に（ ）。

③ 50メートル走で4位に（ ）。

④ 委員会に（ ）。

《語群》 ア 混入する イ 入賞する ウ 入学する エ 参加する

2 ① 彼は立場が不利だと（ ）とすぐ人のせいにする。

② 家で年寄りを（ ）母を手伝う。

③ 蝶の羽根の模様を細かく（ ）。

④ 河原に腰を下ろして花火を（ ）。

《語群》 ア 観察する イ 判断する ウ 見物する エ 世話する

3 ① 景観を（ ）。

② 秘密を（ ）。

③ 国を（ ）。

④ 規則を（ ）。

《語群》 ア 保護する イ 防衛する ウ 順守する エ 保持する

4 ① （ ）身体が自慢だ。

② （ ）相手と戦う。

③ （ ）好奇心を示す。

④ （ ）印象を与える。

《語群》 ア 旺盛な イ 格上の ウ 強烈な エ 丈夫な

5 ① 駅前に（ ）ビルが建つ。

② （ ）技術を発揮する。

③ （ ）買い物をする。

④ （ ）声を張りあげる。

《語群》 ア 見上げるほどの イ 黄色い ウ 値の張る エ 抜きん出た

三

次の1～10の文中の(カタカナ)を漢字で書きなさい。

- 1 本校は(ソウリツ)百周年を迎える。
- 2 (ゼンコウ)をほどこす僧侶(そうりょ)の姿に心を打たれる。
- 3 山の(チュウフク)で一休みする。
- 4 観光船の(コウロ)を変更(こう)する。
- 5 被災地(ひ)の(フツコウ)に協力する。
- 6 (センゾ)代々の土地を離(はな)れて暮らす。
- 7 民衆の(シジ)を得て大統領になった。
- 8 (ゴクジョウ)の料理を味わう。
- 9 友人の考えに異議を(トナ)える。
- 10 お彼岸(ひがん)には家族で墓前に花を(ソナ)える。

2012年2月2日
明治大学付属明治中学校

2012年度 中学入試（第1回）J1 問題 訂正

国 語

問題用紙 12ページ ㊦ 4 《語群》

(誤) エ 丈夫な

(正) エ ^{じょうぶ}丈夫な

社 会

問題用紙8ページ 上から12行目

(誤) 多摩川にさらすた手づくり…

(正) 多摩川にさらす手づくり…

問題用紙8ページ 下から6行目

(誤) g警察大学校

(正) g警察学校

以 上

得	点